

夜の衣を返してぞ

高田 友

初雁の羽風涼しくなるなべに誰か旅寝の衣かへさぬ

凡河内躬恒あふしかうちのみつね(新古今)

「凡河内躬恒」は貫之と俱に古今集撰者を務め、また三十六歌仙の一なり。出自卑しきを以て和泉大掾いづみのだいじやうにて終る。小倉百人一首「心あてに折らばや折らむ」の歌にて名をとどむ。

一首は「初雁の羽交はがひに立つ風の涼しきを感じるほどに何人か旅寝の床に衣を返さで寝ぬるを得べき」とは言へり。衣を裏に返して寝ぬれば夢の中にて思ふ人に逢ふを得むと傳へらるればなり。

「なべに」は「くするにつれて」の義。萬葉にては「なへに」と言ひて濁らず。「あしひきの」「やまのへ」杯、濁音ならで清音を用ゐる、その例多し。

小野小町の歌にも左の如きあり。

いとせめて戀しきときはむばたまの夜の衣を返してぞ著る

小野小町(古今)

これは旅寝にはあらねど、つれなき人を夢だにも見むとて嘆きたるなり。

「ぬばたま」を「むばたま」はた「うばたま」といふもあり。語源を尋ねれば、「檜扇(ひあふぎ)」、異名「烏葵(からすあふひ)」なる草の丈二尺乃至六尺なるあり。その實、黒く且つ丸きに由りて「黒・夜・夕・夢・月」杯なごの枕詞となる。

本朝太古の世にて、「ぬば」は黒き色を指稱したるがゆゑに、「黒き玉」の義にて「ぬばたま」と謂ひたるが語源なりと言ふ。

一説にまた、鳥の羽の如き玉とて、「烏羽玉」の謂ひなりきと言へれど、さは語源俗解に過ぎず。「烏」を「う」と讀むは字音(呉音)なり。和語の語源の字音より出づとは牽強附會の謗りを免れざればなり。

「檜扇」はまた薄き檜の板を糸にて綴ぢたる扇の名。貴人の顔を翳かざさむが爲に用ゐられき。草の「檜扇」は形態これが扇に似たるに據りて此は名附けられる。尾張より安藝に至る地域にて栽培せられ、孟秋(初秋)に麗オレンジしき橙色の花をぞ附くる。

偕、今、冒頭「初雁」の歌を新體詩風七五調の詩に翻案せむ。

衣返して寝ぬれこそ

戀ひしき人を見めといふ

ああ初雁の聲著き

長け行く秋の草枕

Tradition has it that you could see your beloved in your dream

If you went to sleep with your clothes turned inside out.

Oh, the visiting wild geese are heard honking

As autumn is deepening on my journey.

我が若き砌、伊勢を経て鳥羽に旅せしことあり。土産物屋にて繪葉書を見めたるに傍らにポストあり。父母に便りせむとて、棧敷に坐り、甘酒を呑みつつ雁書をなむ認むる。

萬葉も後期に至れば「父母」と申せど、さは唐國より男尊女卑の因習傳はりたればなり。本朝にては古く萬葉初期には「母父」と母を先に置きてぞ謂ひし。

かくて簡牘の裡にて詠める

今宵こそ衣返していざ寝ねめ 佛にだに母父を見む

母父の面影欲ればぬばたまの今宵見えむ旅の夢もが

時ありて、家に歸りて母に逢ひたるに、我が頭を打擲して言ひけるは、「孝養の志篤き子に言はれましかば嬉しくもあらまし。汝、歌を詠まむと欲すと雖も、何爲粗略に思ふ親を出汗に使ふべけむや」と。

また、時に思ひを掛けたる相弗ありき。その名なる五文字を句の頭に据ゑて詠みける

奥鳥羽や雁の羽交に立つ風の何かは誘ふ涙なるらむ

(おくとばや／かりのはがひに／たつかぜの／なにかはさそふ／なみだなるらむ)

「おくとば」はまた October の謂ひなり。

今一つ、

朧月霞める空へ立つ雁は春を惜しとや甚だ鳴くらむ

(おぼろづき／かすめるそらへ／たつかりは／はるををしとや／ここだなくらむ)

(令和五年八月二十八日受附)